

## 書評・紹介

D. F. Roberts, N. Fujiki and K. Torizuka (eds.)

### *Isolation, Migration and Health*

Cambridge University Press, Cambridge, UK, 1992, 267pp.

本書は1990年7月30—31日の両日、福井市で開催された国際人類生物学会 (IAHB) のシンポジウム『隔離集団と移住』で発表された研究成果である。この学会は人類集団の遺伝的構成と人類の適応能を国際レベルで調査研究するために1969年に設立された。この国際会議は同学会の第20回記念行事としてのシンポジウムであり、アジアでの学会開催はこれが初めてであった。本書は表題が示すように隔離集団、移住、健康に関する内容であり、22章とエピローグからなっている。

人類集団では地理的隔離と社会的隔離（社会・経済的階級、宗教、人種など）とがある。隔離集団では外部集団から隔離をしているため、この集団内だけで配偶者を選択しなければならない。したがって、隔離集団では必然的に近親婚率が高くなる。近親婚率が高い集団では劣性遺伝病や先天異常の頻度が高くなる。本書の第1章は編者の一人である藤木典夫会長の隔離集団（山村、孤島など10集団）での近親婚率と遺伝病に関する研究である。これら隔離集団での近親婚率は非常に高頻度であったが、最近では年次と共に減少している。第3章（柳瀬敏幸）は隔離集団の打開を近親婚率で示し、更に隔離打開が示す生物学的影響を論じている。第5章（P. Vogel）は隔離集団が打開した場合の効用について述べている。第4章（評者）は、近親婚率に影響をおよぼす要因について述べている。第7章（D. P. Mukherjeega）ではインドの近親婚率を報告し、ある地域では近親婚率が70%と高い。この国での近親婚率は年次と共に上昇したり、横ばいだったり、減少していたり地域により様々である。

人種間の類似性を調べるのに、種々の遺伝子頻度を用いて、人種間の遺伝的距離を計算する方法がある。第9章（B. Bonne-Tamia ら）は種々の遺伝子頻度を用いてイスラエル人の種族間の遺伝的距離を調べている。第12章（斎藤成也ら）は遺伝的距離測定法の比較である。第18章（P. Lefevre-Witier）はサハラ砂漠のトワレグ族の微移住の効果、第19章（P. Rudan ら）はアドリア海沿岸の移住の研究である。

国や地域が異なれば食生活や気象条件も異なる。そこで、移民の子孫と母国民間で疾患の罹病率を比較すれば、これら疾患の成因には遺伝と環境要因のどちらがより関係しているかが分かる。第17章（I. Prior）はTokelau島からニュージーランドに移住した人々についての体重、糖尿病、通風、高血圧、血圧についての経年的研究である。第20章（原均ら）は日系移民の糖尿病の研究である。日本からハワイとロスアンゼルスに移住した日系人ならびに広島在住の日本人の間で、栄養摂取量、糖尿病の有病率、高コレステロール血症、HLD と LDL コレステロール、高血圧の割合等の比較研究を行っている。同じく、第21章（金沢康徳）はシアトルとサンパウロ在住の日系移民と東京都と愛東町（滋賀県）在住の日本人における糖尿病Ⅱ型と西洋化についての報告である。第22章（三村悟郎）はハワイ在住の日系人（沖縄出身）と沖縄在住の日本人における虚血性心疾患に影響をおよぼす環境要因についての報告である。

エピローグ（D. F. Roberts）では本書全体の解説をしている。編者のRoberts教授は長年にわたり *J. of Biosocial Sciences* の編集長を務められた方であるため、文章は非常に読み易い英文になっている。本書は人類遺伝学、疫学、公衆衛生学、人類学、人口学の研究者にとって非常に有益な書であるので、一読をおすすめしたい。

（今泉洋子）